

近世以前の服飾素材研究を基にした現代ファッション素材への提案
Garment Materials Proposal based on Survey of Costume Colors
before Japanese Modern History

柚本 玲^{*1+}, 成田 千恵^{*2+}, 和田 早苗^{*3+}, 雨宮 敏子^{*4+}
Lei Yumoto^{*1+}, Chie Narita^{*2+}, Sanae Wada^{*3+}, Toshiko Amemiya^{*4+}

*1 文化学園大学服装学部, 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Faculty of Fashion Science, Bunka Gakuen University,

3-22-1 Yoyogi Shibuya-ku, Tokyo, Japan

*2 日本女子大学家政学部被服学科

Faculty of Human sciences and design, Japan Women's University,

*3 江戸川大学社会学部, 非常勤講師

Part-time Lecturer, College of Sociology, Edogawa University,

*4 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

Graduate Courses of Humanities and Sciences (Doctoral Program), Ochanomizu University,

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The aim of this study is to propose the color combination proper to fit the contemporary use of colors, based on the survey of costume colors in the early Japanese Modern History. In order to pursue this idea, the present authors examined the sense of seasons which inherited from ancient period in "KASANE-IROME". "KASANE-IROME" means the arrangement of colors of the costumes which associated with flowers or plants of seasons since the Heian Period. We examined descriptions about "KASANE-IROME" in the records of "UTA-AWASE", a poetical composition match, and in the literature written in the Heian period. We also analyzed the relationship between the seasons and costume colors in books concerning costumes.

The relationship between seasons and costume colors in "SHOZOKU-SHO", books concerning costumes, has been analyzed. As the results, a lot of colors with names of seasonal flowers or plants were found in the descriptions in the records of "UTA-AWASE". On the other hand, two surveys were examined in order to make clear which colors or plants people associate with each season. We found several common colors or plants or scenes for many people associated with each season. Alternatively, we surveyed against some subjects with questionnaire which colors or plants people associate with fabrics dyed by several levels of dyeing concentrations. Consequently, red fabrics made subjects think of the colors of cherry blossoms, peaches and azaleas. Accordingly, we suggested the fabric making methods for bringing people to mind the sense of each season.

*1) yumoto@bunka.ac.jp

要旨:本研究では、古代より日本で服飾文化に深く取り入れられてきた季節感を見直し、現代の服飾素材に応用することを模索した。その方法として、平安時代より行われた衣服の配色の工夫「かさね色目」に注目した。かさね色目はその多くが四季折々の自然の景物や草花などをあらわしている。かさね色目の初期的な記述が見られる資料として歌合がある。そこで、歌合の記録に見られる服飾の色・かさねの名称および解釈を検討し、歌合にみられた服飾と季節感との結びつきを、文学作品や平安時代以降の装束書の記述から追究した。また、現代の季節感がどのような言葉であられるのかを検討するため、被験者に対して各季節に連想する自然物及び色の調査、ならびに、染色布の色と想起される自然物(花など)の関係について調査を行った。

平安時代の歌合では、左一赤色、右一青色を基調として様々な色が重ねられ、季節に相応しい草花の名称を冠した色目が用いられていたことが窺われた。また、各季節で連想するものや色をアンケート調査したところ、多くの被験者に共通して連想される色やものが明らかになった。染色布を調製し(濃度数段階)、色名やイメージされる植物などについてヒアリングを実施したところ、調査実施時の季節に関わらず、桜、桃、ツツジは赤色系の染色布の色からイメージされる花であることがわかった。以上の結果をふまえ、季節感を現代の服飾素材に応用する方法について試料を製作し検討した。

配当決定額

平成 23 年度	500,000 円
平成 24 年度	500,000 円
合計	1,000,000 円

研究の目的

日本では古来より季節を示す色名が多く使われてきた。また服色としてそれを取り入れることにより、季節感あふれる豊かな衣生活文化を醸成してきた。しかしながら現在、温暖化した気候、冷暖房の普及等により、暦と実感が一致しないことも事実である。とはいえ、四季のある日本において、生活に季節感が溶け込む豊かな文化を継承していくことは、我々の衣生活、ファッションにより大きな広がりをもたらすはずであると考えた。

物質的に充足されている現在、ファッションのコンセプトは一通り出尽くされたように感じられる。しかし、だからこそ今、季節を衣服に取り込むという古代からの洗練された衣生活文化の概念をあらためて見直すことに意義があると考えた。

そこで、本研究では、季節感を取り入れた服飾文化としてかさね色目に注目し、かさね色目を応用した服飾素材を表現するために、文献上に表れたかさね(「かさね」は「重ね」、「襲」のどちらもあらわすこととする)の名称および解釈を検討する。この研究結果を応用し、現代の素材を用いて季節感を感じられる方法を提案することを目的とする

研究の方法

1. 服色と季節感の文献調査

① 平安時代のかさねについての文献調査

- ・ 歌合の記録(「仮名日記」、「漢文日記」など)を対象として歌合に参加した人々の服飾および色について検討する。
- ・ 平安時代の文学作品において、歌合の記録に表れたかさねの名称および服飾の色がどのように描かれ、人々はどのような感情を抱いていたのかを検討する。

② 装束書の記述・解釈の検討および整理

- ・ 『雅亮装束抄』(平安時代末)、『雁衣抄』(鎌倉時代末)などの装束書のかさね色目に関する記述を検討する。

2. 被験者が季節感を感じる色に関する調査

① 各季節に連想する自然物及び色の調査

現代の人々は季節感をどのように感じているのかを明らかにすることを目的として、季節(各月)から連想される自然のものや色についてアンケート調査を行う。

② 染色布を用いた色・自然物(花など)のイメージに関する官能評価

濃度を段階的に変化させた染色布を濃淡順に並べ、その色に対する色名とイメージする自然物についてヒアリング形式で回答させる実験を4月に実施し、同様の実験を夏(8月)、秋(11月)、冬(12月)に実施し、季節と回答の関係について検討する。

3. 古代より我が国で服飾文化に深く取り入れられてきた季節感を、現代の服飾素材に応用する方法を提案するための検討を行う。

研究の実施計画

[23年度]

1. 服色と季節感の文献調査

- ・ 平安時代の歌合の場における服飾・および色について、『平安朝歌合大成』を用いて「十巻本歌合」、「廿巻本類聚歌合」などの記録を検討する。
- ・ 『宇津保物語』、『落窪物語』、『源氏物語』などの物語、『枕草子』の記述において、歌合の記録に表れたかさねの名称および服飾の色がどのように描かれているのかを検討する。
- ・ 『雅亮装束抄』、『雁衣抄』などの装束書の記述から、歌合にみられたかさねの具体的な色の組み合わせを抽出し、検討する。

2. 被験者が季節感を感じる色に関する調査

- ・ 様々な解釈のかさね色目を現代の素材へ応用する手法について、現在ある素材で試作するための方法を検討し、試作サンプルを製作する。

[24年度]

1. 服色と季節感の文献調査

- ・ 前年度と同様、引き続き文献資料の検討・考察を行う。
- ・ 研究成果を、一般社団法人 日本家政学会 関東支部 若手の会 2012年夏季企画 講演会にて発表する。

2. 被験者が季節感を感じる色に関する調査

- ・濃度を段階的に変化させた染色布の色と自然物(花など)に関するアンケートを行い、季節と回答の関係を調査・分析する。
- ・国内学会での研究成果の公表
研究成果を、一般社団法人日本繊維製品消費科学会 2012 年年次大会で公表する。
- ・「春夏秋冬から連想する花および色の組み合わせ」についてのアンケート調査を実施する。

3. 研究成果をまとめ、報告書を作成し広く公表する。

研究の成果

1. 服色と季節感の文献調査

平安時代の文献資料の中で、かさね色目の初期的な記述が見られる資料として歌合がある。歌合とは、左右に分けた和歌を合わせて優劣を比較し、勝負を判定する文学的遊戯である。平安時代の中期には遊宴性を強めていき、服飾に関しても様々な趣向を凝らすことのできた様子が歌合の記録から窺われる。

史実として伝えられる歌合のすべてが現在伝わっているわけではないが、行事次第が具体的に記されている「仮名日記」、「漢文日記」などの記録にみられる参加者の服飾について、平安時代の文学作品の服飾描写を参考にして、記述のない服飾を補いつつ服装全体を視野に入れて検討した。取り上げる時期としては、それまでの歌合とは性格が異なるとみられる、天喜四年(1056)「皇后宮春秋歌合」よりも前に開催された歌合を対象とした。

例えば、「～がさね(襲・重)」とあらわされる色目として次の記述がみられる。

- ・延喜 13 年(913)3 月 13 日 「亭子院歌合」
「左は赤色に桜襲、右は青色に柳襲」
- ・延喜 21 年(921)5 月 「京極御息所褒子歌合」
「左は赤・二藍がさねの唐衣、右は青色に朽葉がさねの唐衣」
- ・天徳 4 年(960)3 月 30 日 「内裏歌合」
「装束は青色に柳襲」、「装束赤色に桜襲なるべし」
- ・寛和 2 年(986)7 月 7 日 「皇太后詮子瞿麦合」
「羅の二藍重の汗衫」、「右は、青色に蘇芳重」
- ・長元 8 年(1035)5 月 16 日 「関白左大臣頼通歌合」
「青色に菖蒲がさねの織物の指貫」
- ・長久元年(1040)5 月 6 日 「斎宮良子内親王貝合」
「左は撫子重ねに棟の裳唐衣、右は菖蒲重ねにおなじ唐衣どもにて」

3 月開催の歌合には「桜」、「柳」、5 月開催の歌合には「撫子」、「菖蒲」と、季節に相応しい草花の名称を冠した「～がさね(襲・重)」が用いられている。

ところで、瞿麦の色目について、鎌倉時代末期の成立とされる装束書『雁衣鈔』の「近來細々用習狩衣色々」には、「瞿麥。面蘇芳。裏青。或面用紅梅。兩説也。」とあり、『物具装束鈔』の「布衣事」には、「瞿麥狩衣。面薄蘇芳。裏青。四五月着之。」とあり、蘇芳と青色という組み合わせが見られる。「皇太后詮子瞿麦合」の右方の青色と蘇芳重の中の蘇芳はまさにその組み合わせであり、瞿麦の重ね色目との関連性も考えられる記述となる。このように、右方の装いには「なでしこ」ということばは見られないが、瞿麦を取り入れた装いであったことが推察された。

この文献調査の研究成果の一部を、一般社団法人 日本家政学会 関東支部 若手の会 2012 年夏季企画 講演会(2012 年 8 月 4 日、於 文化ファッション研究機構)にて発表した。



Fig.1 The flier advertising the lecture.
講演会のポスター



Fig.2 A snapshot of the meeting.
講演会の様子

2. 被験者が季節感を感じる色に関する調査

2.1 染色布を用いた色・自然物(花など)のイメージに関する官能検査

現代の被験者は布地の色に対してどのような季節感を有するのかを探ることを目的として、染料濃度を段階的に変化させた染色布を調製し、その色名、イメージされる植物などについてヒアリング形式による官能検査を実施した。

染色布には 14 匁絹羽二重および綿金巾を、染料には直接染料 C.I. Direct Red 81 (Sirius Red 4B) を用い、染料濃度 0~5% o.w.f. (o.w.f.: 対繊維重量比) で 16 段階に染色した。染料は自然界に比較的多くみられる色の一つとして赤系統の色とし、染色方法が単純な直接染料で綿と絹ともに染色可能な染料の中から決定した。被験者 6 名 (20 代女性: 一般色覚者) に対し、順不同で提示した全染色布 (8 cm × 9 cm) を各自の感覚をもとに色の薄い順に順位付けさせた。次に、各自が並べ替えた順に、各々の染色布について思い浮かぶ色名、および、イメージされる植物などの名称についてヒアリングを行った。

測色の結果、絹布の方が各染色布間の色差が大きかったことから、官能検査は絹布について検討することとした。被験者実験の結果からは、濃淡順の並べ替えについて、いずれの被験者も 1% o.w.f. までの低濃度で染色したサンプルを正しく並べることができた。また、色が濃すぎない方が多くの名称が挙げられ、イメージがしやすいものと考えられた。

上記の実験は 2012 年 4 月に実施した。この結果をふまえ、染料濃度 0~1% o.w.f. で 6 段階に染色した 14 匁絹羽二重を試料として、4 月と同様の被験者 6 名に対し、2012 年夏 (8 月)、秋 (11 月)、冬 (12 月) に同様の官能検査を行った。その結果、使用される色名は実験回により多少異なったが、その理由は季節よりも色の判断基準が変動するためではないかと考えられた。また、季節に関わらず、桜、桃、ツツジは染色布の色からイメージされる花であることがわかった。その他にイメージされた自然物から、染色布の色から連想されるものには、被験者が身近に、かつ実際に接することができる花や植物が影響を与えていることが示唆された。

2.2 国内学会での研究成果の公表

上記研究成果の一部を、一般社団法人日本繊維製品消費科学会 2012 年年次大会 (2012 年 6 月 24

日)で公表した。

2.3 各季節に連想する自然物及び色の調査

現代の人々は季節感をどのように感じているのかを明らかにすることを目的として、季節(各月)から連想される自然物や色についてアンケート調査を行った。

6月を上部、12月を下部とし、円状に各月を配置したアンケート用紙に「季節ごとに思いつく自然のものや、色をご記入下さい。」と設問を記述し、自由記述で回答させた(Fig.3)。対象は、18歳から24歳の学生96名(女性79名、男性11名、無記入6名)、35歳から40歳の女性3名の合計99名であった。2012年10月から11月に実施した。所属、氏名、性別、年齢、出身に関する項目は、差し支えない範囲で答えるよう依頼した。

その結果、回答は植物、風景(海、空、月、天気など)、イベント(クリスマス、お正月など)、食物、動物、その他に分類できた。出現頻度はこの順に多く、植物が382件(20%)、続く風景が302件(16%)、であった。各月で見ると、多い順に4月の植物、1月、6月、7月、8月の風景の回答件数が多かった。各月で思い浮かぶ

色の回答結果からは、冬(1月、2月、12月)は白、春(3月、4月)はピンク、初夏(5月)は緑、夏(6月、7月、8月)は青、秋(10月、11月)はオレンジ、茶が多く回答された。また12月には赤と緑が多く回答された。思い浮かぶ植物として最も多くあがったのは、3月と4月の桜であった。続いて10月、11月の紅葉(こうよう)、6月のアジサイ、7、8月のヒマワリとなった。また、風景としては回答件数が多い順に1月、2月、12月の雪、7月、8月の海、6月の雨となった。イベントとしては、クリスマス、ハロウィンが多く回答された。

これらから、冬の白は雪、春のピンクは桜、夏の青は海、秋のオレンジ、茶は紅葉が理由であったと考えられる。ただし、6月の青は海ではなく、雨から連想されていた。またイベントが理由となっている色として、10月ではハロウィンのかぼちゃのオレンジ、12月ではクリスマスカラーの緑と赤が挙げられた。

このように現代においても、多くの被験者が季節に対して色や植物、風景などのイメージを共有していることが分かった。これらのイメージを色の組み合わせとして提案することで、素材の色により、ある特定の季節を感じさせることができる可能性が示された。

3. 季節感を現代の服飾素材に応用する方法の検討

上記の結果をふまえ、様々な解釈のかさね色目を現代の素材へ応用する手法を検討した。

まず、歌合に見られるかさね色目のうち、桜がさねに注目した。桜は人々にとってその色と季節の認識が一致しやすいと判断したためである。

現代の解釈の一例として、日本の色 植物染料のはなし(吉岡 常雄)¹⁾より桜がさねを例示した(Table 1)。Fig.4に桜がさねを示す。色は文献2における色彩索引のRGB値を用いて示した。

Table 1のように桜がさねは白と紫、白と二藍(ふたあい)、白と赤の組み合わせである。これらに近い色の市販の毛糸を組み合わせ、試料を作成した。また、かさね色に使用される色を再現するため、染色を試みた。

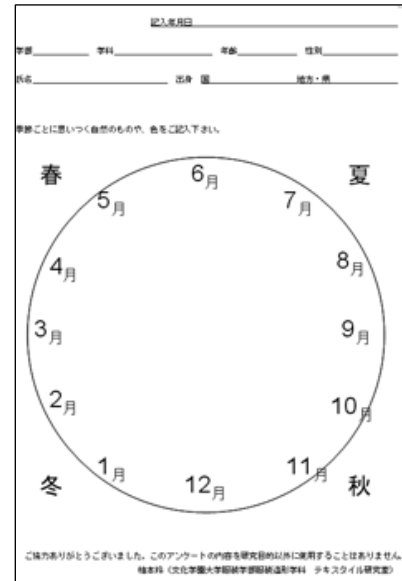


Fig.3 Questionnaire form.
アンケート用紙

Fig.5 に市販の毛糸を用いて、2色ないし3色を組み合わせて製作した試料を示す。それぞれに示した毛糸の色名は文献 2 と毛糸を目視で確認して判断した。桜がさねを表現する試料として、よこ糸を白(胡粉)として平織を実施した。その際、たて糸は長春色(ちょうしゅんいろ)あるいは紫を用いた。また、二藍(ふたあい)を表現するため花田(標)と蘇芳を交互にたて糸にした場合の試料も製作した。さらに、紫と白を二本取りで編地を製作した。これらを現代の新しいあわせとしても検討し、右 3 つの試料を紫陽花のかさねとしても提案することとした。

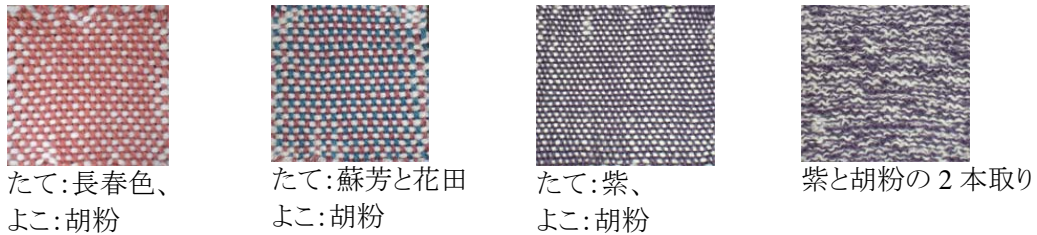


Table 1 Current interpretation for "KASANE-IROME".¹⁾
現代のかさねの解釈¹⁾

季節	かさね	表	裏
春	桜がさね	白 白 白	紫 二藍 赤

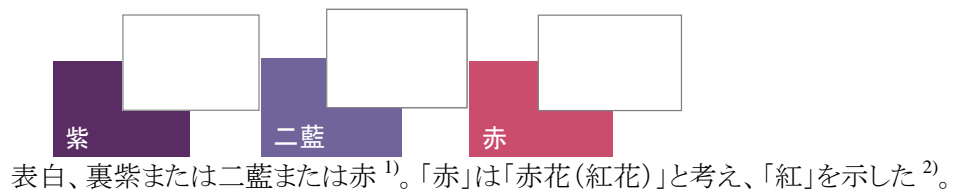


Fig.4 Color combination for "SAKURA-GASANE".
桜がさね

Fig.5 Represented samples of "SAKURA-GASANE" using wool yarns.
桜がさねを毛糸で表現した試料

また、数色で濃度や媒染剤を変化させて調製した染色布を製作した。これを用いた数種の新しいかさねの組み合わせ例を Fig.6 に示す。



Fig.6 Examples of color combination "KASANE" newly proposed in this study.
染色布を用いた新しいかさねの組み合わせ例

4. まとめ

日本では古来より季節を示す色名が多く使われ、服色として取り入れることにより、季節感あふれる豊かな衣生活文化を醸成してきた。そこで本研究では、季節感を取り入れた服飾文化として、かさね色目に注目し、文献上に表れたかさねの名称および解釈を検討した。また、現代の季節感がどのような言葉であられるのかを調査した。これらの結果をもとに、季節感を感じられる素材を提案することを目的とした。

- 1) 平安時代の歌合では、左一赤色、右一青色を基調として様々な色が重ねられ、季節に相応しい草花の名称を冠した色目が用いられていたことが窺われた。
- 2) 各季節で連想するものや色をアンケート調査したところ、多くの被験者に共通して連想される色やものが明らかになった。
- 3) 染色布を調製し(濃度数段階)、色名、イメージされる植物などについてヒアリングを実施した。結果、季節に関わらず、桜、桃、ツツジは赤色系の染色布の色からイメージされる花であることがわかった。

主な発表論文等

[学会発表]

雨宮 敏子, 柚本 玲, 成田 千恵, 和田 早苗:「染着量の異なる染色布における色差の測定及び官能検査による比較」, 一般社団法人日本繊維製品消費科学会 2012 年年次大会 (2012 年 6 月 24 日)

[雑誌論文]

和田 早苗:「平安時代の歌合における服飾—二藍を中心に—」, 服飾美学, 第 53 号, pp.1-16 (2011 年 12 月)

[口頭発表]

和田 早苗:「王朝文学と日本の服飾」, 一般社団法人 日本家政学会 関東支部 若手の会 2012 年夏季企画 講演会 (2012 年 8 月 4 日)

柚本 玲, 雨宮 敏子, 成田 千恵, 和田 早苗 (査読なし); 染着量の異なる染色布の色の測色値と官能評価値の比較; 一般社団法人日本繊維製品消費科学会家政学会 第 65 回大会 (2013 年 5 月 17~19 日開催・発表予定)

参考文献

- 1) 吉岡 常雄著; 日本の色 植物染料のはなし: 紫紅社 (1983)
- 2) 濱田 信義 編; 日本の伝統色; パイ インターナショナル (2011)